

## 自閉スペクトラム症に対する潜在的態度測定課題の開発

### [1] 組織

代表者：横田 晋務  
(九州大学基幹教育院)

対応者：橋本 照男  
(東北大学加齢医学研究所)

研究費：物件費 15 万円

### [2] 研究経過

本研究で対象とする自閉症スペクトラム障害(以下、ASD)は、人との円滑なコミュニケーションや意思伝達に困難さを有し、偏った強い興味や儀式的な行動、聴覚や触覚、味覚などの感覚に過敏さを呈する神経発達障害である(DSM-5; APA, 2013)。高等教育機関に在籍する発達障害学生のうち約5割はASD学生であり、その在籍数は近年増加傾向にある(日本学生支援機構, 2020)。しかし、ASDは、その障害特性が周囲の学生や教職員から見えづらいため、支援の必要性が理解されづらいことや、支援を受けることへの周囲の不公平感などが円滑な支援実施を妨げる問題として挙げられる(高橋, 2012; 横田・松崎・田中, 2020)。したがって、ASD学生への支援の充実には、周囲の存在の障害者に対する態度について検討する必要があると考えられる。

ASD者に対する潜在的な態度を測定する方法として、本研究では、Implicit Association Test (IAT; Greenwald et al., 1998)を用いる(Fig.1)。IATは単語、あるいは画像の分類を行うことにより、ターゲット(本研究では障害者と定型発達者)と属性(価値判断)の連合強度を測定し、個人がターゲットに対して持つ意識を捉えようとするものである。

IATに関する妥当性検証研究では、基準関連妥当性の検討として、その他の潜在的態度の課題や、質問紙結果との妥当性が検討されてきた。しかし、これらの指標では、その尺度そのものが持つ妥当性に左右されるため、生理学的指標を用いた妥当性の検討を行うことが必要である。そこで本研究の目的として、障害者に対する潜在的態度を測定するためのIAT課題の開発および、機能的磁気共鳴画像法(fMRD)による脳活動からの予測可能性を検討した。具体的には、fMRI内

で障害者に関するイラストを見ている際の脳活動データから開発したIAT課題による潜在的態度変数の予測可能性について検討することを目的とした。



Fig. 1 IAT 課題の刺激図

研究活動の概要について、2020年度は新型コロナウイルスの流行により、出張が制限されたため、対面での研究打ち合わせを行うことができなかった。これにより、研究計画やデータ解析などについての打ち合わせをメールにて6月、10月、11月、12月に行った。

### [3] 成果

#### (3-1) 研究成果

2020年度においては、定型発達大学生を対象として、開発したIAT課題の妥当性を検討するため、ASD、および身体障害に対する顕在的・潜在的態度と社会的望ましさと関連について検討を行った。社会的望ましさについては、バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版(谷, 2008)、障害に対する顕在的態度については、5因子からなる多次元態度尺度(生川ら, 1995)、潜在的態度はIATによるD scoreを算出した。

結果として(Fig. 1)、潜在的態度と社会的望ましさについては有意な相関が認められず(ASD:  $r = 0.01$ , 身体障害:  $r = 0.14$ )、顕在的態度の一部の因子と社会的望

ましさに有意な相関が認められた(ASD:「地域交流」( $r=0.5$ )、身体障害:「実践的好意」( $r=0.48$ ))。以上より、障害に対する態度としてより社会的望ましさの影響を受けづらい潜在的態度を用いて、ASD に対する態度を測定することの意味が見出されたと考えられる。脳機能イメージングデータについては、ASD、および身体障害の画像を見ている際の脳機能画像のコントラストに有意差を見出すことができなかった。今後は、引き続き、脳活動データから IAT 課題による潜在的態度変数の予測可能性について、検討を行う。

#### [4] 成果資料

本課題は、現在上記の分析、および論文化の準備中であるため、発表された論文はまだない。

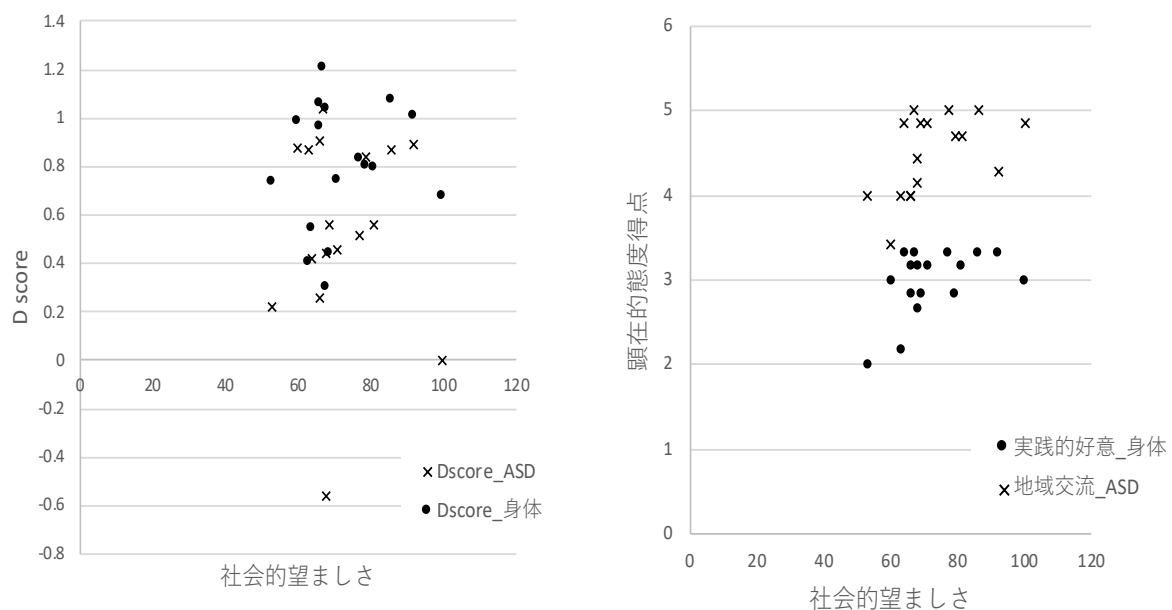


Fig.1 態度指標と社会的望ましさとの関連

#### (3-2) 波及効果と発展性など

ASD に対する潜在的態度を測定するための手法は未だ確立されていない。本年度の研究成果にて明らかになったように、健在的態度指標については、社会的のぞましさの影響を受け、肯定的に結果が変化することから、対象者における障害に対する態度を正確に測定できるとは言い難い。

上述のように、ASD 者に対する支援に関しては、社会的コミュニケーションや認知的特性による困難さへの支援が中心的であり、これらの特性は一見して理解し難いため、支援ニーズが周囲から理解されづらく、円滑な支援実施を妨げる上で問題となる。周囲の理解を得るためには、周囲の存在の ASD に対する理解が促進され、肯定的な態度を示すことが重要である。本研究によって、そのような周囲の ASD に対する態度を正確にとらえるための指標が開発されることにより、潜在的態度に影響を与える要因について検討を行う応用研究に波及させることが可能となると考えられる。